

■ 書 評 ■

馬淵 仁 [著]

『「異文化理解」のディスコース——文化本質主義の落とし穴——』

東京学芸大学 佐藤 郡衛

本書は、異文化間教育、国際理解教育、共生のための教育の背後に潜む文化本質主義の読み解きとその解体を意図したものである。挑戦的なタイトルにふさわしく、教育の国際化に関わるこれまでの議論の問題性が浮き彫りになっており、読み応えがある。本書の特徴を通してその意義について述べてみたい。

まず、第1は日本の海外・帰国子女教育、国際理解教育に関するディスコースの把握に成功している点を指摘できる。「帰国子女の中に、構築され理想化された欧米を見出そうとする視点があった」「日本の社会や教育の問題点が指摘されると同時に、帰国子女や帰国子女教育こそが、その問題解決の契機になるという主張」等々の議論、さらに、狭義の文化間の差のみに注目したり、集団間の力関係に踏み込まなかったりする規範的な国際理解教育の議論の背後に潜むディスコースを取り出し、それを文化本質主義と特徴づける。つまり、「日本を一枚岩的にとらえ、かつ常に特殊的で、海外と比べると日本の社会や教育は問題が山積し、改革しなくてはならないという一方的な言説」のことである。このディスコースの説き明かしは、海外子女教育や国際理解教育の研究における仮説構成の再考を促す。

第2の意義は、これまでディスコースの消費者として位置づけられてきた海外のビジネスマン、学校教員、そして母親をディスコース分析の中心においたという着想にある。3つのグループを政策担当者や研究者がつくりだす公的なディスコースの文化的仲介者として位置づけ、文化仲介者が、「公的な言説をいかに理解し、解釈し、それに応答しているかを調査することを通じて、その教育観、文化に関する理解を炙り出す」ことを試みている。インタビュー調査を通して、文化仲介者には「コンフリクト・フリーな考え方」と「ナイーブな言説」があると指摘する。それは、異文化理解や共生について「協調のすばらしさは説かれるが、コンフリクトへの関心は低く、よしんばコンフリクトが生じることが想定されても、それは努力によって乗り越えられる、乗り越えるべきだという」規範的な言説であり、文化間の権力関係を視野に入れないアプローチのことである。その背後にあるのが文化本質主義であり、それに囚われる限り、コンフリクト・フリーかつナイーブな規範的言説は、常に再生産し続けられる。海外・帰国子女教育や国際理解教育はこの文化本質主義の呪縛からいかに逃れることができるかという重要な問題を提起している。

第3の意義は、文化本質主義の問題を指摘するにとどめず、そこからの解放の方向性を示している点にある。著者は、公的な言説と文化仲介者との見解の相違、日本人が海外に住みつくことや海外と日本を行ったり来たりする「根無し草」に文化本質主義からの解放の芽を読み取っている。「根無し草」という「ディアスポリックなアイデンティティが従来の国家や民族性に規定されたアイデンティティに置き換わる可能性を秘めている」という指摘は、アイデンティティ研究に新しい視野を提供する。

しかし、本書を読み進めていくといくつかの疑問もわいてくる。第1は文化仲介者のディスコースの分析についてやや物足りなさを感じた。文化仲介者をディスコースの生産者として位置づけるならば、ディスコースを重層的にとらえる必要があるだろう。つまり、国や民族のディスコースと企業、学校、家族のディスコースを相互関連の分析がないと、文化仲介者は公的ディスコースの消費者としての側面だけが浮かびあがってしまう。今後、企業理事（日本人学校・補習授業校の運営委員会の理事を務めるビジネスマン）、母親（PTA役員）、教員の体験という個別的な文脈に即した分析から、それぞれのおかれた社会的な文脈をも視野に入れた分析を進めていく必要があるだろう。例えば、企業理事は企業論理や企業言説の中で生きているが、そうした独自の言説とここで取り上げている公的なディスコースとの相互の関わりを分析の視野に入れることで多様なディスコースを描くことができるように思う。

第2は、文化本質主義からの解放に関する議論についてである。企業理事や母親の中に、文化本質主義をこえる萌芽が見られること、その重要な根拠として「根無し草」に対して肯定的評価が見られることをあげている。しかし、「根無し草」に対する否定的評価から肯定的評価に転化することで文化本質主義からの解放と解釈できるのか、また、評価がどのように変化するのか、あるいは変化の過程でどのようなコンフリクトが生ずるかといった疑問も出てくる。さらに、「根無し草」を文化本質主義に対峙するものとして位置づけるならば、「根無し草」は別の規範的な言説へと転化する。著者は1章で「徹底した本質主義の脱構築が迫り、もう一方で古い本質主義への誘惑と新しい本質主義への模索が姿を見せる」と指摘するが、文化本質主義の脱構築からいかにして「根無し草」が浮かび上がってくるかについて読み取ることができなかった。今後、キー概念である「根無し草」について議論を深めることと文化仲介者のディスコースの時系列的な分析を進めていくことが課題になろう。

第3は、本書におけるジェンダーの位置づけについてである。著者は、本質主義の議論を深めるには、国や民族だけでなく、ジェンダーの視点を取り込む必要性を主張している。文化本質主義から解放されてもジェンダーには囚われているということが指摘されている。1つの文化の「内にある差異」としてジェンダーに注目しているが、ジェンダーと国や民族とのダイナミズムをどのようにとらえるのかという点、文化本質主義の理論構

成にジェンダーがどのように位置付くかといった点がわかりにくい。ジェンダー研究の成果を取り込んでいくにはより踏

み込んだ議論が必要のように思う。

◆A 5 判 338頁 本体3,800円

京都大学学術出版会 2002年12月刊

■ 書 評 ■

武藤 孝典 [編著]

『人格・価値教育の新しい発展——日本・アメリカ・イギリス——』

滋賀大学 紅林 伸幸

イングランド、スコットランド、アメリカ、そして日本、本書の編者は、普段の会話と変わりのない、その軽妙な語り口で、読者をそれらの教室に導いていく。それは、さながら道徳教育紀行といった調子である。頁をめくるたびに、各国の子どもたちが道徳の学習をしている様子を教室の窓からのぞき見ているような印象を受ける。もっとも、ここに紹介されている学校の多くは、教室をのぞき見るための窓があるはずの教室と廊下とを分け隔てる壁を、そもそも持たないかもしれないが。

さて、本書は、1993年に始まる編者の海外の人格・価値教育実践に関する訪問研究の成果をまとめた、道徳教育のテキストである。解説によれば、氏の訪問国は4カ国に及ぶが、本書に取り上げられているのは、その内のイギリスとアメリカに、日本を加えた3国である。もちろんそれらの国で行われている価値・人格教育の実践は多様であり、そのすべてが本書において網羅的に取り上げられているわけではない。しかし、本書が取りあげる実践構想は、現在我が国が進めている教育改革においてモデルとなっている

イギリスとアメリカで、道徳的側面を担う教育実践として特に期待されているものであり、注目するに十分妥当なものである。

第1章「イギリスにおける人格・価値教育の発展」が取り上げるのは、1989年のナショナルカリキュラム採用後の教育の中で、学力問題と並ぶ国家的な課題とされているPSE (Personal Social Education) である(新井浅浩氏)。PSEは「子どもの人格及び社会性の発達のための教育の総称」(p. 21)であり、宗教教育、性教育、キャリア教育等を具体的な内容としているが、中でも特に重要なのが2000年よりナショナルカリキュラムの中に必修として位置づけられた市民性教育である。ただし、本書ではPSEとしての紹介が中心となっているため、市民性教育に注目した紹介分析は必ずしも十分ではない。本書が書かれた時期を考えれば仕方ないことではあるが、後述する本書の持つ意義に鑑みれば、なぜ市民性教育が必修化されたのかを含めて、その分析紹介が間に合わなかったことは残念である。

第2章「アメリカにおける人格・価値